様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０３４５

研究課題名（和文）アルジェリアの現代文学状況

研究課題名（英文）General Study on the Algerian Modern Literature

研究代表者
青柳　悦子（AOYAGI, Etsuko）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：７０１９５１７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：アルジェリアの現代文学状況について、アルジェリアの歴史、社会背景、文学史的背景、出版状況、作家の現状、作品内容、研究状況などからその特徴を把握した。文献研究と現地調査とを平行しておこない、生きた文学状況を照らし出すとともにその問題点の析出に努めた。アルジェリアの主要な作家のなかからとりわけ重要と思われるムルド・フェラウーンの作品を分析して、これまで指摘されていなかった価値を明らかにするとともに、アルジェリア文学研究をめぐる問題を指摘した。

研究成果の概要（英文）：We carried out the Research on the Literary Situation in Algeria by examining Algerian Modern History, social background, literary history, circumstances in publication, authors' state and their works, properties in research activities. By doing investigation both in books and in the field, we brought out the actual situation of the Algerian Literary World and pointed out problems underlying there. Among many important writers in Algeria, we picked up Mouloud Feraoun and clarified the merit of his works neglected up to now. Thus we figured out problems in reseach about the Algerian Literature.

研究分野：文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：文学一般　アルジェリア　フランス語圏文学　多言語状況　ポストコロニアル　北アフリカ文学　マグレブ文学

１．研究開始当初の背景

(1)全般的な背景

地中海南岸に位置する北アフリカの国アルジェリアは、もとフランスの植民地であり、90 年代に過激化した国内テロが 2010 年を迎える頃にはほぼ沈静化し、次第に安定した社会状態を迎えつつあった。この好機に、まだまだ日本では知られざるアルジェリア文学の実情について明らかにするとともに、高い水準を保っているアルジェリアの個別の文学作品についても紹介・研究をおこなうことが必要とされていた。また出版事情や文学教育のあり方など、アルジェリアにおける社会と文学のかかわりについて知るための多面的な調査・研究が始められるべきであると思われた。

世界でももっとも過酷であったと評される 133 年にわたるフランスの植民地支配を受け、現在もさまざまな面で旧宗主国との複雑な関係を抱えるアルジェリアは、現在、文学・文化研究の分野において世界中でおこなわれている〈ポストコロニアル研究〉の観点からも、きわめて重要な研究対象であり、アルジェリアの現代文学に包括的な視線を注ぐことで発見できる事柄は非常に多く、また有益であることが予想された。

とりわけ言語的観点からみると、アルジェリアは、フランス語を「公用語」には認定しないが、社会全体が現在でも大きくフランス語に依存する、アラビア語・フランス語二言語併用社会である（さらに口頭言語としてのアルジェリア方言アラビア語とアマジグ〔ベルベル〕語が付け加わるが）。アラビア語とフランス語はともに学術活動・文学創作を支える言語として機能しており、アルジェリアの文学状況の多面的な研究は、世界中に広がるさまざまな多言語社会の文学研究を推進する一環としても有益な寄与をなしうると考えられた。

(2)学術分野における背景

近年まで、日本および世界におけるアルジェリア文学への関心は、独立抗争を描いた作品群か、フランスで 20 世紀後半に脚光を浴びた「マグレブ文学」の枠におさまってきた。後者は、ブージェドラ『離縁』（1967）に代表されるフランスへの移住作家による、アラブ系移民の葛藤を描く文学である。しかしＥＵ統合以降、ＥＵ以外の地域からのフランス移住は厳しく制限されており、そうした背景からも既存の「マグレブ文学」は衰兆をみせている面がある。逆に、マグレブ諸国（モロッコ、アルジェリア、チュニジア）では知識人が故国に留まる傾向も強くなっている。研究上の偏りを補完し、また、現在の創作状況に対応するために、マグレブ諸国内で展開される文学活動に目を配る研究がフランスでは少しずつ蓄積されてきているが、日本ではそうした研究はほとんど皆無であった。

そこで本研究では、フランスの研究機関（とくに Charles Bonn 氏の統括する LIMAG「マグレブ文学研究会」）の蓄積を活用しつつ、現地アルジェリアに足を運び、アルジェリア人研究者や現地作家たちとの交流を通じてアルジェリアの文学状況を全体的に把握するとともに、アルジェリアからみた「文学」への問いを世界的な視野で考察することを構想した。とくに旧宗主国フランスの研究者では成し難い、軋轢と屈折を廃した中立的な立場からアルジェリア文学の可能性を問うことができる日本人研究者の特権を生かして、世界の文学研究を少しでも刷新することが要請されていると感じていた。

２．研究の目的

植民地時代の現地民による創作および独立後の現代アルジェリア文学に的を絞って研究する。同時にアルジェリア国内の言語状況・出版状況・教育システム・研究動向を捉える。

申請者が駆使しうるフランス語を中心とした作業となるが、フランス語・アラビア語ならびに地域言語を含めてアルジェリアの文学状況を包括的に視野に収める。

(1)現代文学史概観と作家・作品研究

アルジェリアの文学生産活動は極めて活発であるので、ここ 20 年ほどの現在に近い状況の概観と、アルジェリア(現地民)文学の出発時点からの掘り起しを並行して行う。そのなかから主要作家、主要作品を取り出して集中的に研究すると同時に、そこから見えてくる特殊な問題設定を深く探究する。

こうした作業によって危険な後進国というレッテルのもとにこれまで目が向けられてこなかったアルジェリア文学の多様なあり方とそこで掘り下げられてきた重要な問題設定を抽出し、そこに私たちが学ぶ姿勢を喚起する。

(2)文学の背景となる歴史の再認識、言語や社会状況の調査

植民地時代、独立戦争時代、独立後の国家建設模索の時代、90 年代テロの時代、2000 年以降の現代と、それぞれに歴史的社会背景を精査し文化研究の観点から再認識する。とりわけ言語をめぐるアルジェリアという国の特徴をより明らかにする。

(3)新たな文学研究交流の創出

日本人とアルジェリア人の文学研究上の交流はこれまでほとんど存在しなかった。直接現地の研究者や作家たちと交流を持つことで、グローバル時代にふさわしい、画期的な学術交流を生み出し、新次元の研究成果へとつなげる。

３．研究の方法

(1)現地での調査・資料収集

毎年度 2 週間程度アルジェリアに滞在し、現地社会の動向と文学状況について実地で情報集をおこなう。これによって、アルジェリアの研究者、教育者、作家、作家の関係者、

ほか文化人らとの交流を築き、研究内容を深化させるとともに、アルジェリア側にも新たな視点を提供する。
(2)文献資料研究
多方面の文献研究によって、アルジェリアの歴史や社会事情を把握する。フランスないし欧米で発表・出版されている論文や書物のほかに、アルジェリア国内のみで流通している文献や、インターネット情報も活用する。
また優れた作品について、綿密なテクスト分析をおこなう。
(3)成果発表
国内外で、すなわち、アルジェリア文学の普及もかねて日本国内で、また世界の文学研究に刺激をもたらすために欧米で、さらに研究交流を兼ねて現地アルジェリアで、研究成果を発表する。
また、筑波大学の「北アフリカ研究センター（ARENA)」とタイアップして、日本とアルジェリアの国際会議を企画・開催する。

４．研究成果
(1)現地調査
アルジェリアへは計 3 回の現地調査を行うことができた。1 回目：2010 年 10 月 23 日～11 月 25 日の約一カ月間、アルジェ滞在。2 回目：2012 年 5 月 14 日～22 日、オランおよびアルジェ滞在。3 回目：2013 年 11 月 7 日～14 日、ティズィ＝ウズおよびアルジェ滞在。
2011 年秋、および 2013 年春にも渡航予定であったが、2010 年初頭からの「アラブ革命」後の不安定状況、および 2013 年 1 月にアルジェリア南部の石油プラントで発生したテロ事件を受け、断念せざるを得なかった。だが、こうした事情が要請する現地の社会情勢への注視は研究に資するところもあった。
実現できなかったアルジェリア現地調査を補う目的もあって、2011 年 11 月 10 日～19 日、2012 年 3 月 9 日～18 日、また 2013 年 11 月 15 日～18 日に、隣国チュニジアに滞在して研究発表・研究交流、および北アフリカ現地調査をおこなった。
こうした活動によって、現地の社会状況および文学活動の状況の把握、現地でしか手に入らない文献・書籍の入手、現地在住研究者・文化人との交流、現地への文学研究者としての貢献などの成果を上げることができた。詳細は以下に記す。

(2)現代文学の背景となるアルジェリア社会の特質
本研究によって以下の概観を得た。
アルジェリアでは貧富の格差の放置など数多くの深刻な社会問題が存在している。政治が一般民衆の生活向上を十分に目指しているとは言えない面がある。そのために社会のインフラ整備が非常に遅れている。交通機関の整備の遅れはその最たるものである。
アルジェの地下鉄は着工から 30 年以上たってようやく 1 号線が 2011 年 11 月末に部分開業にこぎつけた。アルジェリアを東西に横断する高速道路は 2006 年に着工し 2010 年に完成予定であったが現在もまだ全線の開通には至っていない。首都内外の道路は慢性的な交通マヒ状態にあり、経済や産業にも市民生活にも多大な悪影響を与えている。住宅問題も深刻で、一世帯用のアパートに親族を含めて 30 人以上が居住するという例も稀ではなく、住居の見通しが立たないために結婚ができない若者も多い。
石油・天然ガスによる莫大な国家収入が、産業の促進に生かされず、むしろ仲介利権目当ての輸入促進に流れている傾向がある。毎年おこなわれる世界の国々の「腐敗度」調査によるとアルジェリアは常に低い地位にある（110 位前後）。社会全体が官僚主義的で、自由や変化を抑圧する傾向が強い。そのために国民は一般に厭世的・悲観的な意識を抱えていることが多く、海外への脱出を唯一の解決策として夢見る人も多い。
一方で、アルジェリアにおける資本主義的傾向の低さは、商業主義や過当競争とは距離を置いた社会環境を作り出し、現代世界においてやや稀な、消費熱に翻弄されない都市民を作り出しているように思われる。無料の医療提供など社会主義的施策の成果もある。
情報インフラの遅れは深刻である。個人へのインターネットの普及が遅れているほか、クレジットカード決済ができない商業施設も多い。都市管理（地番などの不備）や流通・交通問題、治安問題とも合わせ、カード払いと宅配システムによる商業活動はおこなわれていない。せっかく活発な文学創作活動が存在しても、書籍を国内の読者や国外の購入希望者に販売する制度が存在しないのは極めて遺憾である。
書籍を購入するために現地に赴く必要があること、また、雑誌のバックナンバーやすぐに品切れとなってしまう書籍の入手のため現地人に頼んで随時購入しておいてもらう必要があることなどは、上記の理由による。アルジェリア文学が、質が高くとも世界的に知られない理由には、こうした事情もある。結局、作家・著作家はフランスの書店から出版することを望み、そのためには、フランスの出版界に接近する必要などからフランスに移住する文化人が後を絶たない。いつまでも、良質なものはフランスあるいはアラブ圏の中心諸国からしか来ない、という文化的劣位の状況が是正されず、アルジェリアの人々がますます自国の文化を過小評価する悪循環が生み出されている。

(3)アルジェリアの文学状況の概観
①文学史的概観
アルジェリアの現代文学は植民地期のヨーロッパ系作家によって始まると言える。現地人作家の創作活動を「現代アルジェリア文学」の中心と考えるなら、それが本格的に創始されるのは 1950 年頃で、以後の作家たち

を、時期的に大きく３つの群に分けることができる。独立前後の創始期の古典作家（ムルド・フェラウーン、カテブ・ヤーシーン、ムハンマド・ディブ、ムルド・マァムリ、マレク・ハッダドら）、独立後の模索期の作家（ラシッド・ブージェドラ、アッシア・ジェッバールら）、90 年代テロリスムの時代以降を描く現代作家（ターハル・ジャウット、ラシッド・ミムニ、ブアレム・サンサール、アヌアール・ベンマレク、ヤスミナ・ハドラら）。また言語と居住場所によって、フランス移民作家（ラバフ・ベラムリら）、アラビア語表現作家（アフラーム・モステガーネミー、ワシニー・ラレジら）、アマジグ語での文学活動をおこなう作家などがさらに挙げられる。これらは截然と区別できるものではなく、その微妙な融合状態を丁寧にまなざす必要がある。

②現代の文学生産状況

隣国チュニジアでは年間に生産される文学作品は 40 点程度であるのに対して、アルジェリアではざっとその 10 倍の作品が生み出されている（人口比では 3 倍程度）。明治期の日本と比較できるような、ある種の文学創作熱が観察できる。

文学創作は盛んであるが、自国文学に対する研究がまだまだ未発達である点が問題として挙げられる。これは、言語と国との不一致にも起因する。書き言葉ではアルジェリア独自の言語は存在しないため、教育・研究においてもフランス学科(ないしフランス文学研究)、アラビア語学科（ないしアラブ文学研究）という枠の中で、補足的にしか、アルジェリアの文学が取り上げられないという構造的な問題がある。それでも次第にアルジェリア文学研究は、フランスの大学等にポストを得た海外在住研究者などを核にして展開されつつあるが、これもまた、フランス追随型の研究スタンスをもたらす面がある。

③出版・流通をめぐる問題

書物の流通問題は極めて深刻で、出版物を入手することが困難であることが多い。書店の数が極端に少なく（首都アルジェでも数件程度。しかも減少傾向）、そのうえ品揃えが極端に貧弱である。書籍は新刊時にはいくらか出回ってもすぐに店頭から消え、二度と流通ルートに乗らない。出版元への注文購入の制度も、インターネット購入の制度も存在しない。

年に一度秋に 10 日間ほどアルジェで開かれる書籍市（SILA、salon international du livre d'Alger「アルジェ書籍国際サロン」）が書物購入の稀有なチャンスである。大会テーマに沿ったシンポジウムや作家の講演会なども同時開催され、アルジェリアの重要な文化イベントとなっている。

(4)ムルド・フェラウーン研究から見えてくるもの

現代アルジェリア文学の創始者と言われるムルド・フェラウーン（1913～1962）について、集中的な研究作業をおこなった。いわばこの作家を「発見」したことが、本研究の重要な成果であると言える。この作家の作品を検討し直してみると、これまで世界でなされてきたアルジェリア文学研究の奇妙な偏りが顕著に浮かび上がってきた。以下にそれを列挙する。

①フランスの研究者による過小評価

フェラウーンは素朴な地方主義の作品を書く作家と捉えられてきた。しかし実際のテクストは決して素朴ではない。アルジェリア現地民作家の各作品は良質であっても「素朴」の域を出ないという思い込みがフランス人研究者・読者の根底に存在し続けているのだと思われる。アルジェリア人も、この評価を追随的に受け入れるばかりであったと言える。

フランス学校教師であったフェラウーンは、親フランス的な存在とみなされてきた。フェラウーンのテクストに込められた植民地支配への厳しい批判は等閑に付されてきた。

この方向で、伝記的事実も歪曲されてきた。たとえばフェラウーンの友人として名高いフランス人作家エマニュエル・ロブレスは、フェラウーンとの出会い、フェラウーンの創作開始とその出版への助力などの点で、自分の都合のよい虚像を提示し、それが定説とされてきた。

ロブレスはパリの大手出版社スイユ社の編集者でもあり、フェラウーンの著作の刊行の世話もおこなった。ロブレスの介入によって、代表作『貧乏人の息子』には大幅な改変が加えられたがそのことは半ば秘匿されてきた。

さらに重大なのは独立戦争下に執筆され完成された『記念日』という小説の完全な隠蔽である。ロブレスはみずからその完成原稿を読み、出版を却下しておきながら、『記念日』という作品が存在したことをその後も長く秘してきた。一方では、この作品の内容を模倣したような作品を自分で発表してもいる。さらに、フェラウーンが亡くなる直前に書いていた小説断片（タイトルは未定）にあえてこの『記念日』という題を与え、1972 年にロブレスが編集刊行したフェラウーンの撰文集の総題にも用いた。ロブレスによる、フェラウーンの小説『記念日』の抹殺はきわめて意図的で執拗であると言える。

なおこの作品は 2007 年にアルジェの小出版社から『薔薇の街』というタイトルで刊行されることとなった。

②アルジェリアでの文学研究の遅れ

アルジェリアでの文学研究および文学出版にはさまざまな問題があり、これが重要作家の過小評価につながっている。

ア）粗雑な編集・出版

上記『薔薇の街』は、フェラウーンの子息の一人がアルジェに急ごしらえの出版社を

立ち上げて、そこから刊行したが、国外はむろんのことアルジェリア国内でもわずかしか流通しなかった。そのためにせっかくの作品が世に知られず、研究者にとっても入手不能であることが多く、まともな研究の不在につながっている。さらに、編集や校閲がずさんで、数多くの誤植や印刷ミスがあり、作品の価値を低下させてしまっている。

同じことは研究書についても言うことができる。フランスとは異なる視点でアルジェリア文学を綿密に研究する試みがなされたとしても、アルジェリアで出版されるかぎり世界的にも国内的にも流通せず、研究として価値が認められない。また、信じがたいような編集ミスや誤植の残存、原稿の洗練の不足などから、アルジェリアの出版物は内容的にも信頼されない傾向がある。

イ）フランス追随

上記のような背景もあり、信用できる文化的生産物はフランスないしヨーロッパ産のものに限られる、という認識がアルジェリア人のなかに深く根付いてしまっている。

『貧乏人の息子』（初版 1950 年、大幅な削除を施したスイユ版 1954 年）は、長らくアルジェリアの国民文学として小学校・中学校・高校の教科書にも採用されてきたが、それらはすべてスイユ版に拠っている。そのためテクストは簡略化され、陰影が弱められ、全体の構成としても初版とは異なる「少年時代の回想物語」と理解されてきた。

フェラウーンを敬愛するアルジェリア人ですら、ゆがめられて伝えられたテクストや作家像を疑わず、それを覆す資料がアルジェリアから出版されているにもかかわらず、真の姿をみずから問い直そうとしない。文学研究が、文学研究界の強者（フランス）の追随になってしまっており、文化的植民地主義を脱することができていないと言える。

ウ）アルジェリアにおけるタブー

アルジェリア独立戦争を率いた民族解放戦線（FLN）や民族解放軍（ALN）のメンバーが、独立後、現在に至るまで国家を率いているアルジェリアでは、FLN や ALN の行為に対するいかなる問い直しもタブー視されている面がある。FLN・ALN と距離を置き、著作の中で鮮明な批判もおこなっていたフェラウーンの文学や思想が現地で真剣に探究されない背景にこうした事情があると思われる。またこの作家が独立直前にフランス極右勢力によって暗殺されたという悲劇が、アルジェリア国家のための殉教者というレッテルに結び付き、偶像化ゆえに研究が妨げてられてきたことも指摘できる。

③日本人研究者の存在意義と貢献

アルジェリアに対する屈折した意識にゆがめられることなく、客観的な立場から学術的に高度な研究をおこなうことができる日本人研究者のなしうることは大きい。テクストや作家のありようを根底から問い直し、これまでの研究上の偏りを指摘することも可能である。

日本人文学研究者から真面目な研究作業の対象とされることで、アルジェリア人自身が自分たちの文学に対する見方を変える大きな機会を提供できる。

(5)現地への貢献および現地との接触による成果

本研究を通じて、現地の研究者や文学活動に貢献できた点を簡略に記す。

①アルジェ大学、アルジェ高等師範学校、オラン大学、ティズイ＝ウズのムルド＝マムリ大学などの研究者との交流によって、世界の中でのアルジェリア文学の価値について、新たな視点で考える機会を作り出した。

②アルジェリアを代表する現代作家ヤスミナ・ハドラに２回にわたるインタビューをおこないその文学観などを聞き出した。（ともに、パリのアルジェリア文化センターにて）

・1 回目　2010 年 3 月 10 日
https://arenatsukuba.files.wordpress.com/2012/05/report201003.pdf　（要旨）

・2 回目 2010 年 11 月 23 日
http://www.geocities.jp/etsuko_ao/algerie.html　（要旨）

③作家フェラウーンの長男でアルジェリアを代表する文化人の一人であるアリー・フェラウーン氏との交流、およびムルド＝フェラウーン協会の諸メンバーとの交流。

④ＴＶ番組への協力

アルジェリア国営放送 ENTV から取材を受け、その内容が同局の「Canal Algérie」というチャンネルで 2012 年 11 月放映された。日本人のアルジェリア文学研究者の存在が、アルジェリア人の関心を呼んだ。
http://arenatsukuba.wordpress.com/2012/11/09/%E3%82%A2%E3%83%AB%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%AA%E3%82%A2%E5%9B%BD%E5%96%B6%E6%94%BE%E9%80%81entv%E3%81%AB%E5%8C%97%E3%82%A2%E3%83%95%E3%83%AA%E3%82%AB%E7%A0%94%E7%A9%B6%E3%82%BB%E3%83%B3%E3%82%BF/

⑤本研究者のムルド・フェラウーン研究と作品翻訳の試みが、現地滞在中に、主要新聞各紙とラジオによって報道され、大きな関心を喚起した。以下は新聞記事。

・EL WATAN（2013/11/11）
http://www.elwatan.com/culture/le-roman-le-fils-du-pauvre-de-mouloud-feraoun-traduit-en-japonais-11-11-2013-234664_113.php?utm_source=dlvr.it&utm_medium=twitter

・LIBERTE (2013/11/12)
http://www.liberte-algerie.com/radar/le-fils-du-pauvre-de-mouloud-feraoun-traduit-en-japonais-uvre-d-une-universitaire-nipponne-210254

・TAMURUT INFO(2013/11/12)
http://www.tamurt.info/le-roman-de-mouloud-freaoun-le-fils-du-puavre-traduit-e

n-langue-japonaise,5003.html
⑤現地での国際会議の開催
ア）2010 年 11 月 8・9 日にアルジェで開催された「第一回アルジェリア・日本学術セミナー」に運営者の一人として参加し、全体セミナーで発表をおこなうとともに、文学分科会をオーガナイズし日本側議長を務めた。
イ）2012 年 5 月にオランで開催された「第二回アルジェリア・日本学術会議」に開催責任者の一人として参加し、人文学分科会をオーガナイズし日本側議長を務めた。
⑥日本での貢献
2012 年秋にマグレブ文学研究会を立ち上げ、同年 12 月１日に、日本で初めてのアルジェリア文学をめぐるシンポジウムを開催した（〈Journée Mouloud Feraoun：ムールード・フェラウン没後 50 周年記念シンポジウム〉、2012 年 12 月 1 日、於：早稲田大学早稲田キャンパス）。
そのほか、国際会議や講演会でアルジェリア文学研究の普及に努めた。
⑦韓国での貢献
３回の招待発表をおこない、日本の過酷な入植型植民地支配を受けた朝鮮半島とアルジェリアを比較しながら、東アジアにおけるアルジェリア研究の推進を図った。
・2010 年 5 月 1 日、東アジア日本学会 2010 年度大会、於：清州大学校（清州）。
・2010 年 8 月 18 日、於：高麗大学校日本研究センター（ソウル）。
・2014 年 2 月 14-15 日、高麗大学校 BK21 中日言語教育研究事業団特別講演会、於：高麗大学校（ソウル）。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 12 件）
①Etsuko Aoyagi, “An Analysis of the temporal system in Japanese narrative text: On the Taxis Mode Narration and its Functions” , in *Expanding the Frontiers of Comparative Literature: A Return to the Transnational Tradition* (Proceedings of 2010 ICLA [International Comparative Literature Association] Seoul Congress), Vol. I, Ed. Sung-Won Cho Seoul : Chung-Ang University Press, 2013, pp.287-294. 査読有
http://www.ailc-icla.org/site/wp-content/uploads/2013/11/List-of-contents-Vol-1.pdf （目次のみ）
②青柳悦子、「フェラウーン『記念日』論――〈自己更新〉の文学として」『文藝言語研究 文藝編』（筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻）第 63 号、2013 年 3 月、pp.1-62。査読有
http://hdl.handle.net/2241/118971
③青柳悦子「ムールード・フェラウーン『貧者の息子』にみる間主体性――テクストの反語性と新たな人間観の提示」『文藝言語研究 文藝編』（筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻）第 61 号、2012 年 3 月、pp.1-65。査読有
http://hdl.handle.net/2241/117236

〔学会発表〕（計 17 件）
①Etsuko Aoyagi, « Narration instable dans les romans de l’Afrique du nord et le thème de la « trans-subjectivité »; analyse comparée avec le mode narratif japonais », TJASSST2013 (Tunisia-Japan Symposium on Society, Science & Technology), 16 November 2013, at Hotel El Mouradi, Hammamet (Tunisia)
②Etsuko Aoyagi, « Observations », Huitième colloque international sur: L’expérience créative de Assia Djebar, Assia Djebar ou l’oeuvre d’une vie (le 09-11 novembre 2013), le 11 novembre 2013, à l’Université de Mououd Mammeri de Tizi-Ouzu (Algérie)
③青柳悦子、「遺作小説『記念日』――〈自己変革〉の文学として」、〈Journée Mouloud Feraoun：ムールード・フェラウン没後 50 周年記念シンポジウム〉、2012 年 12 月 1 日、於：早稲田大学早稲田キャンパス（東京）
④青柳悦子、「アルジェリア文学の発展――その始祖 M ・フェラウーンの挑戦」、小堀巌先生追悼シンポジウム〈沙漠・乾燥地の自然、環境、文化に関する研究の現状と展望〉、2012 年 6 月 4 日、於：国連大学ウ・タントホール（東京）
⑤Etsuko Aoyagi, « Sur *La Cité des roses* (dite *L’Anniversaire*), l’œuvre posthume de Mouloud Feraoun; les jeux de temps dans le texte », The 2nd Algeria-Japan Academic Symposium, 17 May 2012, at University of Science & Technology of Oran Mohamed Boudiaf in Oran (Algeria)

〔図書〕（計 2 件）
①鷲見朗子、マフムード・タルシューナ、青柳悦子『アラビアンナイトと北アフリカの物語』、京都ノートルダム女子大学人間文化学部人間文化学科「文化の航跡」刊行会、2014 年、84p. （分担、第 3 章「現代の北アフリカ文学にみる家族と自然」pp.42-65）
②青柳悦子訳、エムナ・ベルハージ・ヤヒヤ著『見えない流れ』、彩流社、2011 年、254p.

〔その他〕
ホームページ等
「Prof. Etsuko Aoyagi 青柳悦子のサイト」
http://www.geocities.jp/etsuko_ao/
「筑波大学北アフリカ研究センター」
http://arenatsukuba.wordpress.com/

## ６．研究組織

(1)研究代表者
青柳　悦子　（AOYAGI, Etsuko）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：７０１９５１７１